



天歩

No.160
2018年11月

秋の明浜 俵津秋祭り

無茶々園の創業地である狩浜から東へ車で10分程にある俵津地区。この地の祭は狩浜の翌日、10月の第4日曜日に行われます。俵津も狩浜と同じ明浜町ですが、明浜他愛媛県南予地方の特徴である牛鬼の面が違っていたり、衣装や舞い方など、祭の様式は狩浜と異なるところが多くあります。大きな違いとしては、俵津の大浦地区の天満神社と、脇地区の大山神社二つの神社から、それぞれ異なる神様を乗せた二基の神輿が地域を練り歩く事。二つの神社と一緒に祭を行うのは明浜町内だけではなく、全国的にも珍しいことです。毎年交代で片方が先に神事を行い、宮出、もう一方の神社へ向かいます。今年は天満神社から先に宮出を行いました。二つの神社と一緒に祭を行うことで、必然的に神事を行う場所も多くなり、神輿や牛鬼が練り歩く距離も長くなります。神事を行うのはそれぞれの神社と三か所の御旅所、計五か所。神職による祝詞とともに狩浜地区同様に巫女の舞、五ツ鹿も行われます。巫女の舞はその五か所以外にも無茶々園グループの福祉施設、めぐみの里・海里でも実施。五ツ鹿は、今年子供が生まれた家々でも披露。今年はめでたいことに12軒の家々を廻ります。そのため運営側は大忙し。舞手を連れ俵津中を走り回ります。巫女の舞は狩浜同様に小学生、五ツ鹿は大人が舞う狩浜と違い、俵津は中学生が舞います。「途中で飲んでしまう大人やったらこんな件数はできません」と言って運営委員は笑います。

俵津の祭の見どころは牛鬼お練り。二基の神輿と共に集落を廻る牛鬼は一体ですが、この時間になると、もう一体の牛鬼を運び出し、頭を外した牛鬼同士をぶつけ合います。それぞれの牛鬼の中には、



上：牛鬼のお練り。意地と意地とのぶつけ合い。左：五ツ鹿 右上：牛鬼のカブ（頭）表情も衣装も地区によって異なる。右下：俵津地区生産者・事務局スタッフもちろん参加。

神輿の担ぎ手も混ざり、大浦地区と脇地区に分かれて入ります。準備が整ったらいよいよ牛鬼同士をぶつけ合います。ある程度距離を取り助走をつけ、相手の牛鬼目がけ突進し正面からぶつけ合います。勢いよくぶつけ合うので中の担ぎ手への衝撃は相当なもの。しかし、それに構う間もなくぶつかった瞬間からお互いを押しあう力比べが始まります。お互いに地区の意地をかけ負けないという思いがぶつかり合い、それを何度も繰り返します。この牛鬼お練りが始まったのはまだ7～8年前のこと。その頃の若手から祭の見せ場を作りたいという意見から生まれました。狩浜と違い俵津は御旅所では、牛鬼が出てくることはありません。牛鬼や神輿の担ぎ手はその間待機しています。俵津地区でも人の集まる場所で、この地区ならではの祭の見せ場としてできたのがこの牛鬼お練りです。また、俵津と狩浜の間にある渡江地区からも担ぎ手が加わり人数が増えたこともこのお練りができるようになった一因です。渡江は牛鬼がありません。狩浜は、近年ではやや薄れてきましたが、本浦地区が牛鬼、大狩浜地区が五ツ鹿などというように、狩浜地区の中でも祭の役割が決まっていました。一方で俵津地区はそういった区分がなかったこともあり、渡江地区に住む牛鬼担ぎたい若者も俵津の祭に参加するようになりました。狩浜の祭が守り伝承していくものなら、俵津の祭は時代に合わせ変えてきたものと言えるでしょう。そういったところも違いの一つかもしれません。

実は今年は、7月の豪雨被害の影響もあり祭の開催自体危ぶまれる状況でした。例年四か所であった御旅所は一か所減らしての開催となりました。祭は当日だけの事ではなく、舞の練習や指導、御旅所の設営、牛鬼やしめ縄の準備など一か月以上前から人手を要します。無茶々園以外にも柑橘生産に従事する人の多いこの地は、豪雨被害による園地の土砂崩れなどにより、どこも農作業に遅れが出ている状態です。その中で祭ができるのかと議論が交わされました。しかし、一度やめてしまうと復活させるには相当なエネルギーが必要になる、中止させてはならないと開催が決まりました。自分たちが子供の頃祭がとても楽しかった、今の子供たちにも見せたい、楽しんでもらいたい。大変な時期かもしれないが頑張って続けようという思いで今年も祭が行われました。俵津はじめ明浜町や西子市は、全国の地方同様に人口減少、高齢化が問題となっています。今年のような災害がいつ来るかわかりません。俵津地区の祭はもしかしたらこの先も少しずつ変わっていくかもしれません。それでも、次世代の子供たちにもこの地に生まれてよかった、この先も引き継いでいきたいと言えるような祭はきっと続いていくと思います。



yaetoco 成長記録

今年でついに6歳になったyaetoco。保育園からもついに卒園です。生まれてからこれまで、イヤイヤ期もあったような、なかったような。時に県外に連れ出して、みんなの前でお披露目会をしたり、時に一人飛行機で運ばれ、箱の中から顔を出すと新しい里親に出会ったり。様々な人の手によって育てられ、一人一人の生活に寄り添いながらyaetocoは育ってきました。

yaetoco が生まれるさらに5年前に、前進となるお母さんの存在がありました。これがまあとても体も大きく、手のかかる子でした。昔ながらの会員さんをご存知かもしれませんね。今、精油抽出はプロであるエコロジー四万十さんに依頼していますが、昔は無茶々園ですべて作業を行っていました。「これからは、加工品を開発しなければいけない。無茶々園らしい、そして無茶々園でしかできないものは何か、そして消費者の喜んで頂くもの。環境に配慮したもの。安心、安全、感動。そして町づくりに貢献できるものを。」とジュースの搾り粕を使ったエッセンシャルオイルを、自分たちで抽出し始めたのが2007年。「ある日突然、3m以上の蒸留器が明浜事務所にドンと届いて『これでエッセンシャルオイルを作るぞ！』」（社長に）言われた時は何を言い出すのだろうか」と当時の様子を語る大津園子さん。大きな夢を抱いて、ポーランドより輸入したアランビック社の蒸留器。購入後は、スタッフの2人が、毎日代わる代わる火の番から時間の記録、蒸留水・精油抽出作業の繰り返し。これがまあ大変。園子さんと一緒に、蒸留器の世話をしていた川越江身子さんは「蒸留器の中の蒸気が漏れないよう、お祭りで使う牛鬼組のさらしを集めてねえ。」と。さらし！？

一体何に使っていたのでしょうか。「加熱炉と蒸留窯の境目にさらしをぐるぐる巻きにした後、その上から泥を塗っていたのよ。今思い返すとかなり大変だったけど、不思議と面白かったなあ。日々の仕事もこなしながら、決まった時間に蒸留器の様子を見に行っ。額の汗をぬぐいながらの作業も大変だったけどいい思い出よ。」と笑いながら語ってくれました。そのころは、どこか昭和を感じさせる和風のデザインで、様々な種類のエッセン



上：佐藤真珠の福真くん。ぴかぴかの一年生。左：噂の蒸留器と園子さんと川越さん。右：yaetoco シリーズ大集合。これからもよろしくお願いします。

シャルオイルを商品化していました。その後、改めてコンセプトを見直し、エッセンシャルオイル+明浜の地域資源を主原料にしたコスメ事業を展開。当初の夢であった、今までにない新しい価値を創出し、地域の良さを発信していくという方針はそのままに、自然派化粧品水のOEM会社のアルデバランの暮部さん、デザイナーの迫さんらと一緒に地域を巻き込んで、ブランディングを行っていきました。そうして、明浜のお祭りの掛け声から「yaetoco」が誕生。無茶々園の生産者へのお披露目会、東京での発表会を経て、2012年10月に産声を上げました。今や生協での取り扱いや全国のお店にも立ち並ぶように。予想以上のご注文で欠品してしまったり、処方見直しのために販売休止したりと、嬉しい悲鳴やトラブルもありましたが、様々な困難を乗り越えて今やすっかり無茶々園の顔となっています。この6年で、愛媛県の南部の田舎から発信した商品とは思えないほど、多くの方に支えられ急成長してきました。

「地元出身の女性が、足元にある資源を使って、自分たちの良さを表現し、都会と相互評価しあえる商品を作り、主体性をもって情報発信（販売）を行い、自立して働ける環境を作ること。」これが今のyaetocoの目指すところ。しかしながら、地方から都会へ一度出て行ってしまった地元の女性は、なかなか地元に戻ってくることはありません。

近くにはコンビニも信号もない、田舎と呼ばれる明浜町。そこに事務局を構える無茶々園のスタッフ7割は県外出身者です。よそ者から見た無茶々園の取り組みは魅力的に見えるのか、居心地の良い環境なのか、ここ数年で20代の割合も増えてきます。yaetocoをきっかけに地元の女性が帰ってきたぞ！という事例は、残念ながらまだないのですが、それでも明浜に移住してきた若いスタッフも加わり、営業・企画・調整を行っています。地元を出て行った人たちが戻ってこない要因の一つとして、「地方・田舎には仕事がない」ではなく、「若者が就きたい仕事がない」のも挙げられるでしょう。もちろん、住居といった仕事以外の環境を整えていくことも、これからの無茶々園の課題です。無茶々園の良いところは、地域の人や都会の人たちと相互にコミュニケーションをとりながら創造的な仕事や、田舎でしかできない豊かな暮らし方ができるところにあると思います。6年経った今、yaetocoが目指すべきところに、一歩ずつ近づきつつあります。

さて、これからは小学生編に突入します。しっかり地に足をつけて、独り立ちしていく年齢に差し掛かってきました。小学校では、先生、友達と多くの刺激を受けて育っていく年ごろでしょう。これまでもこれからも、この天歩を読んでいただいている多くの方々のお世話と見守りがあってこそ、今のyaetocoがあります。これからは、成績優秀な子でなくてもよいので、せめて自立した子になるよう、私どもも共に歩いていきたいと思っています。



無茶々園 

されどモノラック

無茶々園へ来訪されるお客さんのなかには、有機農業や環境保全型農業に取り組む全国各地の農家もおられます。明浜にやってきた農家の皆さんが決まって言うのは、“私はこんなところで農業はできない”。せいぜい石垣の段々畑を築けるくらいの、山の急斜面をそのまま利用した畑は、農家だからこそ驚きをもって受け止められます。

トラクターをはじめとした省力化を図る大型の農業機械がほとんど入らない段々畑で、唯一機械化しているといえるのが運搬用のモノレール、通称モノラックです。単軌道のレールに取り付けた動力車が荷台を押し引きして進む仕組みになっており、道路の通じていない山や畑にも設置することができます。農業のほか林業や土木工事など、傾斜地で重いものをたくさん運ぶ現場で活躍しています。明浜のみかん畑には農道を起点としてこのモノラックが張り巡らされており、総延長は数十kmにも及ぶとみられます（正確には誰も把握していないみたいですが）。今年7月の西日本豪雨によって明浜の畑にも影響が出ましたが、大きな問題になったのがこのモノラックへの被害でした。およそ2mおきに打ち込んだ支柱でレールを固定しており、小さい土砂崩れでもレールがゆがんだり支柱が倒れたりしてしまいます。大規模な崩落で跡形もなく流されてしまったところもあります。秋の収穫期まで2、3ヶ月ほどを残した夏のはじめ。産地全体に及んだ被害を前にして、修繕の枠組みをどうするのか、収穫までに間に合うのか、農業関係者や行政の担当者が頭を突き合わせての検討がはじまりました。



農家から状況を聞き取り現地を回って確認調査を行った結果、明浜町では150か所以上の被害箇所がありました。そのうち無茶々園の農家に関わるものも50か所ほどあります。西日本豪雨が激甚災害に指定されたことで復旧事業の枠組みができたのはありがたいことでしたが、申請にはしっかりした手順を踏まなければいけません。盛夏の日差しが照り付けるなか、巻き尺と測量ポールを手に崩れた急な斜面を歩き回る調査を終えると、修繕を行う業者と農家との間で施工ルートの打合せや工事見積に移ります。修繕工事が本格的にはじまったのは9月のなかばでした。農家人口や農地面積の減少がはじまって何十年にもなりますが、それに合わせるようにモノラックの製造数もメーカー自体の数も少なくなっています。今回課題になった点の一つに、既に廃業したメーカーがあって修繕の目的が立たないことがありました。実はメーカーによってレールの作りが異なるため、破損部分だけ付け替えたり、動力や荷台を単純に積み替えるわけにはいかないのです。30年以上前に設置された古いレールも多く、今回の災害対応にとどまらず、長い目で見るとモノラックメーカーの持続性も当地のみかん作りの足元を揺るがす要素になるのかもしれませんが。修繕の作業は手続きが整ったところからスタートし、特に収穫期が迫った品種がある箇所から優先的に進めています。業者も臨時の修繕チームを整え、何とかみかんの収穫に間に合うように急ピッチの工事が続きます。明浜では、どうにかいつもの通り、みかんを運ぶモノラックのエンジン音が鳴り渡る収穫の時期を迎えています。

左：モノラックの全景。収穫の強い味方です。中：土砂で流されたモノラック。右：ラックが直り笑顔で収穫中の宇都宮亮尚(すけなお)さん。

季節を越えていろいろあった 無茶々の里便り

明浜が舞台の漫画「いそあそび」



ストーリーの中には明浜の風景が広がる。「ここで暮らしているんだよ」と思わず自慢したくなる。

みなさん、西予市明浜が舞台の漫画「いそあそび」をご存知ですか？実は私の弟が漫画家で、この「いそあそび」の作者です。天歩でご紹介しようと思いつつ、連載開始から1年が経ってしまいました。どのような漫画かという、ひょんなことから自給自足することになった中学生が、自生する貝を獲ったり、海藻を集めたり。海辺の田舎町を舞台に繰り広げられる青春サバイバル物語と言ったところでしょうか。都会の人から見たらサバイバルでも、その辺にたくさんいる小魚やクラゲを獲って遊ぶようなことは、一昔前の私らにとっては普段の生活の一部でした。携帯もスマホもないけど特に不便ではなかったあの頃、時間に縛られることなく暗くなるまで遊んで、近所の人に「はよう帰れよー」とか言われて家に帰り一日が終わる。弟の漫画を読むと、そんな子どもの頃の記憶が甦ります。また、作中には明浜の風景も満載です。眼下に広がる美しいリアス式海岸。引き潮になると陸とつながる小島。昔ながらの家屋と袋小路。地元の人はもちろん、一度ここに来た人なら、見たことある景色に親近感が湧くと好評です。まだ明浜に来たことない人も、これを読めばきっと無茶々の里に訪れたいかなと思います。兄なので少し褒めすぎたような気もしていますが、この「いそあそび」は弟がやっと掴んだ本格的な連載のため、あしからず。弟は小さいころから絵を描くことが大好きで、動物からロボットまで、机に嘯り付いて夜遅くまでひたすらに模写していたことを覚えています。周囲の反対もあったけど19歳で漫画家を目指し、他の漫画家先生のアシスタントを続けること十数年、やっと大手出版社での連載に至りました。口数が少なく、ほとんど弱音を吐かない弟ですが、日の目を見ない下積み時代は、つらい日々を送っていたと思います。それでもひたすらに夢を追いかけ、その夢を叶えました。たまた明浜にも帰ってくるのですが、やっと地域の人からも先生、先生と呼ばれるようになり、自信も出てきたのか表情も明るくなった気がします。だからとって偉そうになったり威張ったりするわけでもなく、変わらないまま。そんな弟を少し誇らしく思います。

佐藤真珠 佐藤和文

「いそあそび」佐藤宏海(ひろみ)は講談社「月間 good アフターヌーン」にて好評連載中。単行本は1巻、2巻が全国書店にて絶賛発売中です。

作者より

子どもの頃の思い出を元に描いた作品です。応援よろしくをお願いします。佐藤宏海

よっちゃんない屋オープン

狩浜地区の日常の買い物を支えてきたのは農協が運営していたお店、通称「マーケット」。残念ながら営業不振のためこの9月末に閉店しました。他県では大型スーパーや百貨店の閉店がニュースで取り上げられていましたが、狩浜地区にとっては同じくらいの大打撃。近くのスーパーといっても野福峠を越えた隣町にあり、車を持たない高齢者にとっては死活問題。また散歩ついでに買い物は健康のパロメーターであり、「ありゃ久しぶりやない。元気やった？」とご近所さんとの会話がはずむ社交の場でもあり、この閉店には単にお店がなくなる以上の意味がありました。実は閉店が決まったのは4月頃。突然の発表でした。それ以降地区をあげて喧々諤々の話し合いを重ね、引き継ぎ先を公募することに。その時に手を挙げたのが現在かりえ笑学校の校長を務める原田義夫さん。9月末に閉店、10月1日にはオープンと何ともあわただしいスケジュールの中、狩浜の新マーケット“よっちゃんない屋”として再スタートをきりました。校長兼オーナーの肩書を持つこととなった義夫さんに、この天歩で紹介させてくださいと依頼すると「おかしなことする人もいるもんやな、と全国の人に笑われるんじゃないかな」とにやり。店構えは変わりませんが壁いっぱい大きな看板と、レジの後ろ

よっちゃんないや、とは「寄ってくださいね。」という方言。もちろん、義夫(よしお)さんの愛称よっちゃんの意味も。



に飾ってある地域の有志から贈られた似顔絵がシンボルマークのこのお店は、狩浜地区の生活を支える大きな心意気を持つお店です。第一面で紹介した俵津地区にあったマーケットは西日本豪雨によって土砂が流入。予定を早めてこの夏に閉店しました。こちらでも新しい店のあり方を模索し再建に向けて動き出しています。通信販売の普及など買い物ひとつとっても日常生活を支えるサービスは多様化していますが、地域住民が置いてきぼりにならない工夫や取組の必要性を感じた出来事でした。

無茶々園

生産者のご紹介・浅井良裕さん

明浜町の西の端に位置する田之浜(たのはま)地区。そこでは数少ない農業後継者のひとり、浅井良裕さんは現在38歳。2歳の男の子のお父さんです。田之浜のみかん作りをしている農家で30代以下は2〜3人、あとはなんと60代以上しかいないそうです。50代でも「若手」といわれてしまう農業の世界では貴重な存在です。以前は水産業(ちりめん漁)などで長く働いていましたが、今年4月から父・助良さんのもとの本格的に農業に従事するようになりました。助良さんはかつてUターンして就農後、栽培技術の研究を重ねてきた大ベテラン。みかん作りについて尋ねれば、たとえば剪定については「クリスマスツリーみたいな樹形では見た目の格好はいいけどだめ。木の全体に日が当たるように剪定する。剪定をきちんとやれば、病気も発生しにくくなる。一度に全園地は無理だから、何年もかけて全体を整える…」と話は尽きません。今は足腰を痛めた助良さんに代わって力仕事中心。時々手伝っていたとはいえ、お父さんからすれば「まだ1年生やからな。」時間

をかけて学ばなければいけないことがたくさんあります。お父さんが隠居するのは当分先ようです。最近では後継者がなく作れなくなった園地があちこちに増え、「せつかく畑があるのだから自分が作っていけたらいいな」とのこと。これからの活躍に期待しています！



田之浜地区待望の後継者。親子二代で頑張ります！